
ステラになってSAOで大暴れ！

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ステラになつてSAOで大暴れ！

【Nコード】

N2266Z

【作者名】

メア

【あらすじ】

ソードアート・オンライン（Sword Art Online）の世界に神から頂いた、叡智を持つて転生したボクは、叡智を使いSAOを楽しもうとしたら、父親が銀行強盗をして、幼い少女に殺されてしまった。

しかも、殺した幼い少女の家に引き取られて住む事になりました。これはどうにかしないといけないっ！

そして、ボクの容姿がブラックロックシューター・The Gameのステラなのに男って何!？

ヒロインはシノンとシリカが確定。
テイルズキャラも出てきます。

原作崩壊があると思います。シノンをアインクラッドに突っ込んだ
うえに狙撃銃を持たせるので。

この小説は出来る限り、アインクラッドの75層までを書こうと思
っています。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online)?

皆様、はじめまして。ボクは朝田錬(旧姓篠原)というしがないソードアート・オンライン(Sword Art Online)に転生した男の転生者です。

現在の家族構成は、祖父母と母、妹……………ちなみに、全部義理だよ。

はい、お気づきの方はいませんが、転生先からして、妹はシノンこと朝田詩乃。

詩乃との係わりは簡単で、詩乃が殺した銀行強盗犯の息子がボクなんだ。そして、本来ならたらい回しにされたあげく、施設に送られるはずのボクを詩乃の祖父母は、責任から分からないけど、ボクを引き取ってくれたんだ。

最初こそ、詩乃は心を閉ざしていたけど、小学生のころから嫌われながらもずっと詩乃の側にいて、支えながら詩乃の為にいろんな事(外敵排除や身代わり)を二年間していたら、中学生にあがった時くらいから、心を開いてくれるようになった。

詩乃が心を開いてくれた後、転生特典の知識を利用して、義理の母に催眠術の暗示やカウンセリングを施して、元の正常な精神状態にしてあげると、詩乃の好感度はMAXになったみたいだよ。

それから詩乃は、好意と父親を殺した罪悪感からか、逆にボクに尽くしてくれるようになった。

むしろ、依存の領域に入っているよ……………だって、中学生になっ

ても一緒に寝たり、お風呂入ったりと詩乃はトイレ以外、常に一緒にいるから……………ちよつ、物投げないで、リア充死ねとか言わないで！

あと、色々詩乃にやったせいでGGOの髪の毛の色が違うだけのシノンの姿となっている。

「お兄ちゃん、気持ちいい？」

「うん、いつもありがとう」

「気にしないで」

今は、一緒に風呂に入って揚がった後、自室のカーペットに座って、長い髪を詩乃にドライヤーで乾かしてもらいながら、髪の毛のケアをしてもらっているんだよ。

「よし、完成……………うん、完璧」

「いつもの通り？」

「うん、お兄ちゃんはいつも通り綺麗だよ」

「そう……………」

そう、ボクの問題点のひとつは容姿だ。容姿端麗なので普通なら問題無いんだ……………女性ならだけどね。

神様は何をとち狂ったのか、ボクの容姿はブラックロック シューター THE GAMEの主人公ステラにそっくりなんだ。

街を歩けばほぼナンパされるから困り者だよ……………本当にね。

「さて、ボクはいつも通りにパソコンを使うけど、詩乃はどうする？」

「私もいつも通り勉強かな」

「分かった」

詩乃がその辺にある本を取って、ボクの背中に自分の背中を合わせて座り、重力や風力などの本を読んで詳しく勉強しだした。

これは、当然、ボクの差し金だよ。

ボクはパソコンに向かって作りかけの薬のデータを開く。

ボクが作っている薬はHIVとAIDSの特効薬………つまり、

《絶剣》ユウキこと紺野木綿季とその姉を救う為だ。

なぜ、ボクがこんな物を作るかと言うと、神様からいつの間にか貰っていた特典が様々な事についての叡智だ。

強化系ですら無いから肉体的には辛いかもしれないけど、ユウキさん達を救えるなら“いいや”と思ったよ。

「よし、出来た〜」

「お兄ちゃん、何が出来たの？」

「HIV………ヒト免疫不全ウイルスの特効薬とAIDS………

…後天性免疫不全症候群の特効薬のデータだよ」

「……………簡単に言ってるけど、それって凄い事だからね？」

「あははは」

ボクの叡智はその事に深く考え続けると、様々な情報が浮かんで

来るから、それを整理して組み合わせればできるんだよ。

「お金にだって不自由してないのに……………」

「まあまあ、気にしたら負けだよ」

携帯を取り出して、義母に電話をする。

ちなみに、詩乃とボクは都会の中学に進学したので、二人暮らしたよ。

『二人とも元気？』

「うん、元気だよ」

「こっちは問題無いよ、母さん」

しばらく、お互いの近況報告をしてから本題に入る。

「義母さん、これの特許と実物を作って紺野って人達に無料で投与して」

『知り合い？』

「父さんの知り合いの子供さん」

二人共、複雑な表情をしたけど特に問題は無いはずだよ。

『まあ、鍊のお陰で私はアーガスの社長になったけどね』

ちよっ、それ死亡フラグじゃないですかっ!?

「おめでとじ」

『詩乃、ありがとう』

「義母さん、とりあえずおめでとじ。頼んでおいた製薬会社の買収はどうなった？」

『当然、必要そうなのは何かから何まで全部押さえたわよ。その代わり、OSで稼いだお金も三割消えたけど。こっちは個人経営にしてあるからやりたいように出来るわ』

OSは引き取られてから、即座に作ってネット場で販売したら、世界中で馬鹿売れしたよ

さすが一世代先の技術です。さらに、次の年に新しいOSでしたら、またまた馬鹿売れだったので、個人資産が国家予算個人国家並になったから、義母さん達にお金を沢山渡したんだけど、いつのまにかアーガスの社長ですか……………やばいよね。

「じゃあ、この薬達を作って臨床試験通ったら、いつもの通り販売よろしくね。ボクの事は秘匿でお願い」

『任せて。そうだ、茅場晶彦って知ってる？』

「知ってるよソードアート・オンライン（Sword Art Online）を作ってる人だよな？」

『ええ。貴方に技術協力を頼みたいそうよ。どうする？』

これはボクの計画を発動させるチャンスじゃないか……………ふふ、

楽しくなつて来たよ。

「条件飲んだらいいって言うておいて」

『了解。じゃあ、データは明日か明後日にでもアーガスに持って来て………秘書が五月蠅いから、そろそろ切るわね。後、夜更かしとエッチは程々に………でも、孫は早めによろしくね』

「……………」

最後に爆弾発言を残して言った義母さんのせいで、気まずい雰囲気になつちやつたや。

「お兄ちゃん……………」

顔を真っ赤にして照れている詩乃は可愛いと思う。

「エッチする？」

「ぶっ！」

詩乃からも投下された爆弾発言に、ドキドキが泊まらないよ。

「私はお兄ちゃんになら、いいよ？ そうじゃなきゃ、一緒に寝たり、お風呂に入ったりしないから……………むしろ、ウェルカム？」

そんな事を言いながら、迫って来る詩乃にボクの理性は……………
「するか」……………アツサリと敗北しました。

やりたいざかりの中学生には耐えられません。

だから、詩乃をお姫様抱っこして、ベットに連れていきました。

次の日、学校帰りの制服のままアーガスの研究室へと向かいました。

ちなみに、昨日は詩乃の身体を開発するだけで終わったよ。決してヘタレじゃ無いんだから！

詩乃の身体の事を考えたら仕方ないんだよ。

「はい、お兄ちゃん。入館証」

「ありがとう、詩乃」

詩乃が受け取って来てくれた入館証を持って、何個もの嚴重なゲートを潜って研究室に着いたら、20代の男性が迎え入れてくれた。

「君が社長の言っていた開発者かい？」

「そうです」

「私は茅場晶彦、ソードアート・オンライン（Sword Art Online）の開発を担当している」

「ボクは朝田錬、こっちは妹の詩乃」

詩乃は会釈だけして、直ぐにボクの後ろに控える。

ボクの秘書みたいな感じだね。

「わざわざご足労頂いて、すまないね」

「いえ、ついでなのでお気になさらないください。それに、協力

は条件次第ですから」

「分かった。それで、条件はなんだい？」

「まず1個目は、ボク達をSAOのテストと本サービスに参加させて欲しい」

「……………いいだろう」

茅場晶彦はしばらく考えた後、許可をくれた。

「2個目は、武器に銃と弓、蛇剣を追加してくれ」

「おい……………」

「出来れば、狙撃銃がベストかな。3個目はサポートAIやテイマ―系を弄らせて」

「……………銃や弓を入れるのは、SAOでは無くなるから却下だ」

「いや、銃剣とか弓の外側を刃にすればいいんじゃないかな？」

ボクの狙いは、詩乃に狙撃銃を装備させる事だよ。だって、シノンって言ったらヘカート？でしょう？異議は認めない。

「後、最後にオリジナルソードスキルシステムかな」

「ふむ……………」

「用件を飲んでくれるなら、資金援助の追加と技術提供は問題無いよ」

「解った。条件を飲む代わりに、その作業はそちらでやってくれ。後は……………バランスについては難しくするぞ」

「銃の入手難度とかだね」

「ああ。銃弾も一発1000コルから5000コル辺りだな」

「凄くお金いるね……………」

「まあ、それぐらいじゃないとな」

確かに、反則だからね。

「お兄ちゃん、学校にはしばらく休むって連絡しといたよ」

「ありがとう」

それから、ボク達は三人で色々話して、内容を纏める。

「じゃあ、こつちが技術提供するのは、サーバーやコンピュータでいいよね？」

「ああ。しかし、本当にこのスペックは出せるのか？」

「もちろんだよ。五感全てを実装しても、一切重くならない粒子コンピュータを発電機セットで提供するよ」

「では、細部まで徹底的に行う」

「うん。それじゃ、新たな世界を作ろうか」

「うむ」

「何か悪役みたいだよ、2人とも……………」

義母さんの所に行っていた、詩乃が帰ってきて、きつい一言を頂
きました。

その後、ボク達はソードアート・オンライン（Sword Ar
t Online）を改良していった。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online) ? (前書き)

一部変更しました。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online)?

月日が流れて、改造したソードアート・オンライン(Sword Art Online)が正式にオープンになったのでボク達も参加した。

ちなみに、多数の銃や様々な種類の武器を実装したし、装備の成長システムも突っ込んだ。

装備の成長システムは簡単で、一定経験値が貯まる 精錬する 一定確率で成功 装備が成長するという、遊び仕様だよ。

「オープン も問題無く終了したな」

そう、参加したと過去形なんだよね。

「しかし、君の母親は辞任したがいいのかね？」

「モーターマントイ無問題だよ。これから晶彦がやるうとしている事を知っているからね。」

ちなみに、死亡に関してはやめた。やっぱり、生死をかけたほうがいい」

「そうだな。そちらの方が世界として間違っていない。しかし、おまえ達も参加するなら死ぬぞ？」

「死なないように僕達のナーヴギアを改良したから平気だ。まあ、上手いってるかは、わかんないけどね」

施した内容が原作で茅場晶彦が行った事と一緒にだからね。

「ならば良い。それでは、明日……………アインクラッドで会おう」
「了解」

ソードアート・オンライン（Sword Art Online）をログアウトしたボクは、義母さんに書き置きと新薬やOSなどのデータを作ってからお風呂に詩乃と共に入った。当然、洗いっこしたよ。

次の日の3時調度、詩乃と手を握りながらデスゲームにログインした。

「キャラクターネームはren、生別は男……………少しの間だけだから、厳つくしておこう……………いな、ランダムだ！」

容姿を設定した後、普通は装備の選択に入る。原作とは違い、武器を最初に選べるんだよ。だが、ボクはランダムを選択したのでそのままだ。

さて、《はしまりの街》に入ったボクは、ステータスを開いて装備を確認する。

NAME：ren

LEVEL：1

筋力：1

敏捷：1

装備

スモールソード

白い麻のシャツ

白い麻のズボン

灰色の厚布ベスト

灰色の厚布シューズ

「片手剣か」

装備は問題無いね。

問題は、容姿だよ！

自分の容姿のまま女性になってるんですけど？

あれ、特に問題………ちゃんと男だから、問題無いや。

「さて、待ち合わせ場所に行くか」

復習をしておこうかな。

このゲームは、ソードアート・オンライン（Sword Art Online）略称はSAO。

真の仮想世界を構築するナーヴギアの性能を生かした世界初のVR MMORPG（仮想大規模オンラインロールプレイングゲーム）。ユーザーの期待と渴望をうけ、初期出荷分1万本は瞬時に完売した。自らの体を動かし戦う、というナーヴギアのシステムを最大限体感させるため、魔法の要素を排し、代わりにソードスキルという必殺技と、これを使うための様々な武器類が数多く設定されている。また鍛冶や裁縫、釣りや料理、音楽など戦闘用以外のスキルも多数用意され、ゲーム内で生活することができる。

ゲームの舞台は石と鉄で構成され、全百層からなる巨大な浮遊城アインクラッド。内部には都市や村、森や湖などが存在する。上下の

フロアをつなぐ階段は各層一つのみ、その全てが怪物のうろつくダ
ンジョンに存在し、階段の直前には強力なボスモンスターが立ち
だかっている。

通貨単位は《コル》となっている。

ゲームの開始位置はここ、はじまりの街だよ。

「お兄ちゃん、こっち！」

声を掛けて来たのは、明るい水色の髪をした美少女。

「待たせちゃった？」

「ううん、今調度ここに転送されたんだ」

そう言いながら、支給された初期武器の火縄銃を確認する詩乃…
……いや、シノンだね。

「武器は問題無い？」

「うん」

「なら、弾丸と回復アイテム買って《ホルンカ》の村に行こう」

「OK。でも、初期所持金じゃ銃弾は余り買えないけどいいの？」

「ボクのお金も合わせるから、問題無いよ」

初期コルは1200で、弾丸は一発100コルだから12発しか
買えない。

まあ、24発2000コルで売ってるけどね。

「すみません、ちょっといいですか？」

現れたのは深紅の瞳と金色の髪をツインテールにした大人の女性。

「何？」

無表情でクールに対応するシノンに、ちょっと怖がりながらも、聞いてくる女性。

「ゲーム初めてなので、出来たらパーティ組んで教えて欲しいなつて……………」

女性にカーソルを合わせてみると、表示されたのは *sirik a* の文字……………原作キャラか。

「嫌」

「そうですね……………」

「いいよ」

「「え？」」

シリカちゃんを見捨てる？

そんな事が出来る訳が無い。

「お兄ちゃん？」

「ただし、スパルタだから。それでいいなら一緒に行くぞ」

「よろしくお願いします！」

「まあ、お兄ちゃんがいいなら別にいいかな」

シノンも納得したので、銃弾とシリカの防具を購入して、残りのお金をポーシヨンと毒消しに全て使った。

シリカを加えたボク達は、はじまりの街の北西ゲートから出て、草原をひたすら走って突っ切る。《フレンジーボア》というイノシシが出現する。

それに、ボクが、ただの抜き撃ちソードスキル《スラント》で一撃いれてからシリカを前に出す。

「あつ、あの……………怖いですっ！」

「ダガーを構えて、スラントって言いながら、ダガーを抜いたらソードスキルが発動する」

「す、スラント！」

シリカがシノンに無視されつつも、シノンの助言通りにやるが、ただがむしゃらにやってるだけなので、録に発動しないし、被弾も増えている。

「はい、時間切れ」

ボクはイノシシの目にスモールソードを斜めに突き刺し、脳を破

壊する。

このゲームは弱点が色々設定されているから、知っていれば簡単だ。

「あう……………」

「シリカは、しばらくモーシヨンの練習と見学だね」

「はい……………すみません……………」

「ほら、行くよ」

シノンがシリカを引っ張って先に行った。

それから、何度かシリカの練習をやりながらホルンカの村に着いた。

「クエスト行くよ」

「はい(うん)」

ホルンカ村の奥にある民間に入ると、台所で鍋をかき回していたいかにも《村のおかみさん》といった感じのNPCが^{ノンプレイヤーキャラクター}こちらを見て言った。

「こんばんは、旅の剣士さん達。お疲れでしょうから、食事を差し上げたいけれど、今は剣何も無いの。出せるのは、一杯のお水くらいのものよ」

「……それでいいです」「」

システムが認識出来るように、ハッキリと三人で発音した。

「どつぞ」

「……ありがとうございます」「」

水を飲みながら、シリカにレクチャーしていると、隣の部屋から小さな子供が咳込んでる声が聞こえると、おかみさんが肩を落とし、数秒するとクエストの証である金色のクエストチョンマークが出現した。

「これがクエストの合図なんですね」

「うん」

「何かお困り事でもあるんですか？」

定番のセリフを言うと、おかみさんは身振り手振りで伝えてくる。内容は簡単で、娘を助ける為に滅多に出ない植物モンスターからはいしゅというアイテムを取って来てくれという内容だ。

その代わりに、報酬として《アニールブレイド》という、初期にしては強力な剣をくれる。

「……任せてください！」「」

クエストを受けると《？》が、進行中を現す《！》になったので、ボク達は外に出て、村の奥へと行き、村で1番大きな家に入る。

そこには、いかにも村長ですという御老人がいて、お茶を飲んでいる。

「「こんばんは」」

「おや、旅人さんか……………どうじゃ、わしの話を聞いていかんかね？」

椅子を進められたので、座って話を進める。

「「聞かせてください」」

クエストが始まり、御老人が喋りだしたら、シノンが椅子に座ったまま瞑想しだす。

「あの、聞かないんですか？」

「シリカ、時間が勿体ないんだよ。だから、修業するよ」

「はい……………？」

理解していないシリカを放置して、進める。

「まず、ステータスからスキルスロットを選んで、体術のスキルと短剣のスキルを習得して」

「分かりました」

理解して無くても、大人しく従って短剣と体術のスキルを覚えたシリカを確認したら、立ち上がらせて殴りつける。

「きゃっ！ 何をするんですか!？」

「修業。ちなみに、村の中はシステム保護があるから平気だよ。ボクの攻撃に中ら無いように避けて反撃するように……………もちろん、短剣装備してソードスキルは有りだよ」

「やっつみます」

シリカは素直に従ってくれるから楽だね。

「やっ！たあっ！」

シリカの攻撃を左右に避けたり、流して防いだりしながら攻撃する。

「ほら、身体全体を使って戦うんだよ。これはゲームであってゲームじゃない。基本的に現実の身体を使っているとと思うほうがいいよ」

「はい！ なら、身体全体を使って……………」

身体をバネの様に使いだしたシリカは、かなりの速度の乗った攻撃をしてくるようになった。

30分後、ようやく御老人の話は終わった。

「そうじゃ、御主達旅人に頼みたい事があつたんじゃ」

「なんですか？」

「私達でよければ、お手伝いしますよ」

「ありがたいのう」

クエストマーク《？》が出現した。

出現条件は、30分間、御老人の無駄話に付き合う事。

「お願いしたい事は、村の近くに出現する《リトルネペント》30体か《ラージネペント》30体を狩って来てほしいのじゃ。こやつらが出現してから、狩りも大変で困っておるのじゃ」

「「「分かりました」」」

三人で返事をしてクエストを受けた後、村長の家を出た時にシリカが発した言葉はひとつ。

「長かったですね」

「「「ああ（うん）」」」

心の底からボク達の思いは一緒だった。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online)? シノン

S i d e シノン

村長から依頼を請けた私達は、村の門から出て深い森の中に入っていく。

「怖いですね……………」

「不気味」

「まあ、気にしちゃダメだよ。あと、シリカにもここからは参加してもらおうからね」

シリカはホルンカ村に着くまでの間……………草原を超えてから一切戦闘をさせていない。

「分かりました」

理由は簡単で、即死する敵が出るからだ。

森に入ってしばらく進むと、私の索敵スキルに敵の反応が出た。

モンスターネームの色は赤だけど、色合いはほんの少し濃く、レッドじゃなくマゼンタといったところ。

このネームの色は、敵の相対的な強さを大まかに計る事が出来る。どう足掻いても勝てない程のレベル差があるモンスターのカーソルは血よりも濃いダーククリムゾン。

対して、何匹狩ってもろくに経験値が稼げない雑魚モンスターはほとんど白に近いパールピンク。

同じレベル帯の敵はピュアレッドで表示される。

「それじゃ、雑魚はお願い」

「はい」「任せて」

二人の返事を聞いた私は、木の幹などを足場に登って行く。

木の上に着いたら、高い木を目指して飛び移り、辺り一帯を見渡せる場所に行く。

「ポジションはここでいい。後はおびき寄せて探すだけ」

私は枝の上に立ち、眼下に居るリトルネプトに実体化させた火縄銃を向ける。

「高低差、風力、重力共に問題無し」

銃口を微調整しながら、1メートル半もあって、ウツボカズラを思わせる胴体の下部で、移動用の根が無数にうごめいている。

左右には、鋭い葉を備えたツルがうねり、頭にあたる部分では捕食用の《口》が粘液を垂らしなが物欲しそうに開閉している。

私はその中でも、花つきと呼ばれる物を狙う。

「……………」

精神を集中させて、テストと日頃ので培った技術を最大限に活かしてブレを無くし、引き金を引く。

すると、火繩が火薬に中って爆発を起こし、銃弾が勢い良く飛んで行く。

飛んで行った弾丸は、花つきリトルネペントの弱点である茎の付け根に中たり、一撃でポリゴンとなって消滅した。

「気持ち悪いから、さっさと狩ろう」

新たな弾丸を銃口から入れて、備え付けの棒で奥に押し込み、銃弾とセットで販売されている火薬を火繩の下の部分に入れる。

「はいしゅはドロップしたから、問題無い……………でも、後二個は最低でも必要……………なら……………」

私が次に目を付けたのは、実つきと呼ばれるリトルネペント。

こいつは、花つきと違って罌^{リトルネ}として配置されているモンスター。

この実つきの特徴は、実を攻撃すると巨大な音と共に破裂し、嫌な臭いのする煙を吐きだして、仲間を呼び寄せる。

「命中」

その実つきの実に、木の枝を投げて破裂させる。

「相変わらず嫌な臭い……………」

臭いに誘われて、沢山のリトルネペントがマップ中から集まって来る。

私はその中から花つきだけを狙撃してはいしゅを集めて行く。
その外側で、お兄ちゃんとシリカがリトルネペントを少しずつ呼
び寄せながら、殲滅していく。

「花つきが沸くまで、援護していきましょう……」

私を狙って下に集まったリトルネペントは一生懸命、私がいる場
所を攻撃しようとするけど、距離が届かないので無駄な事をし続け
ている。

だから、私は拾っておいた石や枝を投擲して二人の援護を行う。

お兄ちゃんは全然問題無い……むしろ、20秒とかからずリ
トルネペントの茎が切り払われて、止めを刺されていく。

下から切り上げた後、瞬時に上から下に切り下げ、身体を捻って
下から斜め上に切り上げて、回転して斜め反対側から斜め下へと切
り下げたあと、腕を戻して止めの突きをリトルネペントに叩き込み
ました。

「オリジナルソードスキル確実にOSSとして登録できますね」

爆散したりトルネペントの残骸を見ているとそう思います。

スキル認識されていないので、ディスプレイすら発生しない強力無比。

「シリカの方は………苦戦していますね」

1対1で2、3回被弾してようやく一体倒せるくらい。

「つまり、ポーション1本でリトルネペント1体………効率悪す
き」

私は、尖った木の枝や石をリトルネメントに投げ付けた。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online)? シリカ

S i d e シリカ

私は綾野珪子、ソードアート・オンライン(Sword Art Online)の中ではシリカです。

生まれて初めてのVRMMORPGにこのゲームを選びました。

理由は簡単で、お父さんが狩って来たのを興味本位でプレイしてみたのです。

ログインした私は、自分の理想の姿をイメージを元にしてキャラクターを作り、SAOの世界に降り立ちました。

最初に驚いたのは、草木の匂いや人の息遣いが実際に感じる事でした。

「すごいです〜」

「ねえ、君1人? よかったら俺達が教えてあげるよ?」

私に声を掛けたのはカッコイイ格好をした人達でしたが、何か嫌な感じがしました。

「結構です……………」

「そついなよ。初心者なんだろう? 俺達が優しく教えてあげるからよ!」

また、嫌な予感がしたので後ろにジャンプしました。
どうやら、腕を捕まれそうになったみたいです。

「っ!？」

「待ちやがれっ!？」

「待ち合わせしているので嫌です！」

男の人達の隙を付いて、脇を抜け、全力で走って逃げ出しました。

それから、追われてる間に水色の髪の女の子と黒い髪の女の子を見付けました。

「はあ、はあ……………」

さつきみたいに嫌な感覚じゃなく、予感みたいなのを感じて二人に話かけました。

結果的に、プレイヤーの人達だったみたいで良かったと思いましたが……………この時は、ですけど。

それから、3人でPTパーティを組み、教えて貰いながら進んで行き、ホルンカ村の村長の家で訓練をして、村の外に広がる深い森へと入っていきました。

それから、シノンさんが木に登って行って、私とレンさんだけになりました。

「シノンが行動を起こすまでボク達も、木の上に避難しておくよ」

「わっ！」

次の瞬間、私はレンさんに抱き抱えられて木の上にいました。

レン君の顔を近くで見ると、やっぱり整ってて凄く綺麗……………さすが、ゲームです。

「始まったね」

「嫌な臭いです」

銃声が2回響くと、嫌な臭いがそこら中に充満し、シノンさんが居る所に敵が沢山集まって来ました。

「じゃあ、ボクが引き寄せるから、頑張ってね」

「はい！」

私達は木から降りて、密集地帯から距離を取って、戦闘準備をします。

「準備OK？」

「はい、行けます」

ポーシヨンなどの確認も終わっているので、問題はありません。

「まずは、1体……………」

レンさんが尖った枝をリトルネペントの付け根に投擲し、見事命中させました。

リトルネペントの1体がこちらに気付いて、這い寄って来ました。

「じゃあ、シリカ……………頑張つてね」

「はっ、はい！」

私は、目の前に来たリトルネペントに近づいて、短剣のソードスキル《カット》を発動して攻撃しました。

カットは素早く一閃するだけの簡単で汎用性のあるスキルです。

私が戦闘を始めると、レンさんも直ぐに周りの敵と戦いだしました。

「っ！」

ツルの振り下ろし攻撃を半歩下がって避けて、ツルを攻撃しながら近づいて肉薄します。

これで、ツルの攻撃は、その威力を充分に発揮出来ない状況になりました。

具体的には、即死攻撃が多少なりとも耐えられるようになるくらいです。

「痛いけど我慢っ！」

風切り音と共に高速で迫って来るツルを体術で避けた……………所にもう1本のツルが迫って来て、私の左肩に直撃しちゃいました。

「HPが3割も減っちゃった!？」

HPが大幅に減った事に気を取られたせいで、私はツルの1撃をくらい、吹き飛ばされて、木に頭から激突して身体が一瞬動かなくなりました。

「はい、そこでストップだ」

私に迫っていたツルをレンさんは、木の枝で地面に縫い付けて、相手の行動を封じちゃいました。

「今の間にポーション飲んで」

「はい！」

ベルトポーチからポーションを取り出して、飲んでみると昔に販売されたリアルポーションと同じ味がしました。

「体術だけじゃなく、短剣も防御手段になるって事を忘れないでね」

「分かりました！」

アドバイスを貰ったので、再度モンスターに挑戦です。

「行きます……………」

リトルネペントに向かって走り出すと、向こうも力づくで拘束を解いて振り下ろして来ます。

「（右から嫌な感じがします）」
ツルの攻撃は、右側から迫って来たので半歩移動して、ツルに短剣を合わせて、相手の力を利用して付け根まで切り裂き、ディレイが終了した《カット》で、文字通り切ってあげると、ポリゴンとなつて消滅しました。

「次、お願いします」

「あいよ」

それから、私は予感のような感覚がした時は無傷で倒し、しない時はなんとか倒せる感じになりました。

『シリカ、援護する』

「お願いします」

メッセージが表示された小窓を確認して、直ぐに援護を依頼しました。

『任せて』

シノンさんは驚異的な狙撃能力で、私が回避出来ない攻撃に対してピンポイントで投擲を行って、ツルの軌道を変えてくれました。

「やあっ！」

リトルネペントの茎の根っこを執拗に攻撃続け、どんどん倒して行きます。

『花つきが出た。少し援護出来ない』

「分かりました」

援護が無くなった私は、背後から迫って来たツルの刺突を少し横に移動して、短剣をツルに突き刺しました。

ツルはそのまま突き進むので、自身の力によって大きなダメージを負ったようです。

「シリカ、気をつけろ！」

「え？ きやつ！？」

私の直ぐ横にリトルネペントがPOP……………出現して、攻撃を仕掛けて来ます。

「わわっ！」

右、左、右、前、前、左、後ろと4本のツルを勘に従ってステップを踏む様に避けたり、弾いたりして生き残る事に必死になりました。

こんな気持ち悪い生物に食べられるなんて、絶対に嫌ですから！

「お〜いけるじゃん。なら、そのまま頑張ってね」

「が、がんばります」

それから、少しして私は普通にパターンを覚えたのか、3体くらいなら同時に相手が出て来るようになりました。

『4：23分か………シノン、纏めて殺して』

『了解、逃げておいて』

「シリカ、木の上に避難だ」

「分かりました」

また木の上に避難すると、今度は強烈な臭いがして来ました。どうやら、沢山の実を同時に破壊したようです。

「シリカ、今の間にステータス振っというて」

「えっと、敏捷がいいですか？」

「シリカの戦い方ならそうだね」

「じゃあ、敏捷に振り回す」

スモールダガーを腰の鞘に戻して、各種ウィンドウを開く仕事を失敗しながらも行ってステータスを表示しました。

NAME：sirika

LEVEL：2

筋力：1

敏捷：1

私はいつの間にか2レベルに上がっていて、ステータスポイント

を2点手に入れていました。

「それじゃ、上げ……………」

ステータスを上げようとした瞬間、シノンさんが居た木のしたの方で、爆弾が爆発したような轟音と火薬の臭いがしてきました。

「さすが、火薬と弾丸……………2000コルはだてじゃないや」

「シノンの下に居たリトルネペントは全滅に近いな」

大量のリトルネペントが群がっていた地面は、黒く焼け焦げていて、多少のリトルネペントを除いて全滅なのは確定です。

「シノンさん、大丈夫ですか!？」

『爆発させたのはジャンプしながらだから、平気。それにしても、簡易手榴弾は強い』

「まあ、残敵掃討開始」

全てのリトルネペントを処理して、ホルンカ村に帰った時には、3レベルとなっていました。

NAME:sirikka

LEVEL:3

筋力:2

敏捷:4

「報酬を受け取ろう」

はいしゅをおぼさんに渡して、アニールブレードを3本頂きました。

村長からは、《アニールダガー》を3本頂きました。

アニールブレードは2本は販売して、シノンさんの弾代となって消えました。

どうやら、村長のクエストはどちらかでも問題無いようです。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online)?

アニールブレードをはいしゅと交換し、アニールダガーをリトルネペント30体討伐報酬として手に入れた。

手に入れたアニールブレードは、必要筋力5の片手剣で攻撃力50、売値25000。アニールダガーは、必要筋力3の短剣で攻撃力40、売値25000。
スモールソードやスモールダガーが攻撃力5や10なので、下層階じゃ、かなり強力な武器だ。

「……………アニールブレード2本とアニールダガー1本は売ったから75000コル手に入ったよ」

「それで、装備揃えますか？」

「それがいいと思う。弾薬も弾丸ももう無い」

設定しといてなんだけど、銃の弱点はやっぱり弾丸などの値段だね。

「そつだ……………ね……………」

「何これ？」

「光ってます！」

ボク達は青い光に包まれて、強制的に転送された。

転送された先には、同じ様な人達が沢山いるうえに、次々と追加で転送されて来た。

「これはいったい……………」

「あれ、GMだね」

場所ははじまりの街。そこに現れた身長20メートルはあろうかという、真紅のフード付きローブをまとった巨大な人の姿だった。そして、そのフードの中身は完全に空洞だった。そう、現れたのはゲームマスター茅場晶彦だった。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

さあ、本格的にソードアート・オンライン（Sword Art Online）の始まりの幕が上がる。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールこのできる2人のうちの1人だ』

「もう一人はお兄ちゃんだよね？」

「だろうね」

まあ、コントロールはほとんど出来ないけどね。

『プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかし、これはゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、《ソードアクト・オンライン》本来の仕様である』

「し……………、仕様？」

シリカが信じられないといった表情で呆然としている。

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、あるアイテムを除いてゲームから自発的ログアウトする事ができない』

「茅場さん、やってくれるね」

シノンはちよと不安みただな。やっぱり、母親が心配なんだろう。

『……………また、外部の人間による、ナーヴギアの停止あるいは解除も有り得ない。もしそれが試みられた場合、ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

「そんな……………」

「……………」

『より具体的には、10分巻の外部電源切断、2時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除、または分解の試み

以上のいずれかの条件によって脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、すでに外部世界の当局およびマスコミを通して告知さ

れている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視してナーヴギアの強制除装を試みた例が少なからずあり、その結果 残念ながら、すでに213名のプレイヤーがアインクラッド及び現実世界から永久退場している』

「いや……………」

「お兄ちゃん……………」

ボクは二人を抱き寄せて、必死に二人を落ち着かせる。その間も話は続き、ついに《手鏡》がアイテムストレージに出現して、勝手に使用された。

「シリカ？」

シリカの姿が大人の姿から、子供の姿……………ゲーム通りの姿になった。

「ど、どうなってるんですか!？」

ボクとシノンの容姿はそのまま姿で、一切変化は……………無い……………いや、あった。長い黒髪がツインテールになっていて、まさに美少女になっていた。

「やっぱり、お兄ちゃんはその格好似合ってるよ」

いつの間にか、装備の画像データがブラックロック シューターの姿となっていた。

「計画通り」

「シノンっ！？ お前の仕業かつ！？」

「茅場さんに頼んだ」

「このっ！？」

抱きしめているシノンを強く抱きしめてやる。

「くっ、苦しいです！」

「あっ、ごめ……………」 「凄く似合っていて、完璧な美少女ですよ
お前等っ！？」

しばらく折檻を続けた後、ボク達は酒場でご飯を食べながら相談する。

「これからどうしましょう……………」

「私はお兄ちゃんに任せる」

「なら、ボクとシノンは攻略に参加するけどシリカはどうする？」

「それは……………」

「ボク達と来るなら、ボクが守ってあげるし守る力もあげるよ」

「どうしてそこまでしてくれるんですか？」

「それはシリカが好きだから！」

「っ!」「……………」

シリカは全身を真っ赤に染めて、シノンには絶対零度の視線で見詰めて来た。

「違った、気にいったからだ」

「意味変わって無いからね。まあ、後でO H A N A S H I L
よ」

シノンの満面の笑みに恐怖を覚えたのは初めてだ。

「えっと……………」

「私は別にいいから、シリカの好きにして」

「なら……………お世話になっていいですか？ やっぱ1人だと不安なので……………」

照れながら

「いいよ」

「うん、問題無い」

「ありがとうございます。これからよろしくお願いします」

それから、フレンド登録を行いお互いの位置情報が判るようになっている。

「じゃあ、今日中にホルンカ村に戻ってレベル上げだね」

「その前に買い物かな？」

「うん。買い物に行こう」

ボク達は、はじまりの街にあるNPCが運営している商店に付きました。ここは値段は高いけどいろいろ癖があってヤバイ物を置いているお店だよ。

「いらっしやっといと、いいてえが、ここはお前達のような低レベルの連中が来るとこじゃねえ……………帰んな」

ここは酒場のような所で、敵つい連中がたむろしており、バーテンドーの格好をした店主がそんな事を言ってきた。

「大丈夫なんですか？」

「平気、平気。マスター、ポーリシュ・ピュア・スピリッツとエストラニアをお願い」

「……………アルコール度数96%と98%だ。この書類にサインしな」

「了解」

書類にサインすると、ボク達は奥へと通され、さらに隠し通路を

通って地下へと連れていかれちゃった。

「好きな物を選べ」

通された場所は広い部屋で、壁や棚には多数の装備が置かれている。

「筋力強化系の装備や薬は？」

「その棚だ」

教えられた棚に向かい、装備を見る。ここのアイテムは全て現品限りのあらゆる意味での特価品。

場所を見つげるだけでも、1週間続くクエストを受けないと判明しない。逆に プレイヤーなら知っている奴もいる。

「あるある」

装備で筋力値を底上げする装備………あがる値は1〜50までピンからキリまでである。

当然、値段は最低でも100k（10万）以上する。

「買えませんよ？」

「こつちこつち」

シリカの質問にシノンが答えを定時するみたいだ。だから、シリカをともなってシノンの居る場所にむかった。

シノンが居たのは、レジのカウンターだ。

「はい、シリカ……………引いてみて」

「これはくじ引きですか？」

「そう……………1回1万コルの高額クジだけど……………」

そう、とても高価なハイリスクハイリターンのクジ引きだ。

「それじゃ、引かせてもらいます」

シリカが箱の中に手を入れてクジを選び出した。

「これは変な感じ……………こっちは嫌な感じでダメ……………これはいい感じがする……………あっ、こちも……………」

「もういい？」

「はい！」

最終的にシリカが箱から出したのは7つで、そのうちの1つを購入した。

「じゃあ、開けますね……………」

ボクとシノンが喉を鳴らした瞬間、シリカがクジを剥がして中身を見ずにマスターに渡した。

「少し待ってな」

マスターはレジの奥にある倉庫へと消えて行った。

「何が来るか楽しみよね」

「シリカはボク達の期待に応えてくれるかな？」

「お願いですから、プレッシャーを掛けないでください！」

「あつ、お兄ちゃんにこれ似合いそう」

「そうですね、これと合わせるといいんじゃないですか？」

二人が選んで来たのは奉仕を行う人達が着る制服。黒と白で彩られた制服。

「なんでメイド服なんだよ！」

「「似合うから」」

そう、執事服じゃなくてメイド服。

女装好きの借金執事が着る方じゃなくて、超が付く程の天才が着ている方だ。

「イ、ヤ、ダ！ ボクは絶対に着ないぞ！」

「なら、こっち」

「いや、こっちの方がいいと思います」

次々と店の中から持って来られる“女性用”の服や装備立ち……

……それを無理矢理合わせられて大変だった。

「速く帰って来てくれ〜!?!?」

結局、いろんな服を合わせられて大変だった。なんで女の子ってこんなのが好きなんだ?

「待たせたな」

「全くだ……………」

「邪魔するのも悪いし……………」「おい」これが景品だ」

マスターが持って来たのは、1500ミリメートルもある細長い大きな箱だった。

「こいつがお嬢ちゃんが引いたAランクの景品……………種別 セミオートマチックライフル、口径7.62mm、銃身長620mm、ライフリングは4条右回り、使用弾薬7.62mm×54R、装弾数10発(箱型弾倉)、作動方式ガス圧利用方式、全長1225mm、重量 4310g、銃口初速830m/秒、有効射程600m……………」

「ドラグノフだと(ですって)!?!?」

「本来は10M(1千万)コル必要な代物だ。よかったな、当たり前だぜ」

「えっと……………わっ、思いです!」

渡されたドラグノフによるけたシリカを二人で支えて、改めてシ
ノンを見る。

「貰っていい？」

「「どつぞどつぞ」「

「重いね……………必要筋力200、攻撃力1000……………」

「あははは……………使えね」

でも、シノンっていえばヘカート？なんだけど、狙撃銃のドラグ
ノフは充分当たりだよね。

「……………大丈夫、まだお金はある……………」

「あつ、それは……………」

「何？」

無造作にクジ箱に突っ込んで取ったクジを開けようとしたら、シ
リカが止めた。

「ただ、嫌な感じがするので……………」

「（どつ思つ？）」「

「（シリカは予感ってか、予知に近い感覚を持つてるみたいだね。
普通は背後の死角から放たれた攻撃は避けれないよ）」

「（なら、試す）分かった。なら、シリカはどれがいい感じだと思
う?。」

「私は……………これですね……………」

シリカは、先程避けていたクジの中から1つ選んで、シノンに差
し出した。

「じゃあ、これをお願い」

「1万コルだ」

「はい」

支払いを終えて、開けたクジは先程のドラグノフと同じランクを
示すAと品物を表す数字……………シリカって、キュピーン
ってなる奴に覚醒してないか?

「お兄ちゃん!」

「うん。シリカ、ここにある残りの5個はいい感じがするんだよな
?。」

「うん、そう感じるよ?。」

「マスター、この5個も頂く!」

シノンと声が揃ったけど、アニールダガーとアニールブレードを
売った代金残り5000コルになろうと購入した。
当たると解っているクジを買わない奴はいないよね。

ボクの叡智から引つ張り出した必勝法でも、Aなんて引けないんだからね。

「万能の指輪、火王の盾、金色の槌、ドラゴンスレイヤー（大剣）、剛竜の指輪、魔狼の首輪だな」

「どれも変なのばかり……………」

「うん、万能の指輪が装備制限無視、剛竜の指輪が筋力値100上昇、魔狼の首輪が敏捷値150上昇……………後は強力なだけかな」

「なら、売って金に変えて装備を整えよう」

「「賛成」」

盾と剣、槌を売るだけで莫大なコルが入ったので、能力値永久上昇の薬と経験値増加アクセサリーとアクセサリー1式を購入する事にした。

シリカが魔狼の首輪増加装備。

シノンがドラグノフと万能の指輪を装備。

ボクが、剛竜の指輪を装備。

後は武器と防具をどうにかしないとね。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online)? (後書き)

装備がチートになりました。基本的に使わないだろうけど。

ドラグノフとか、一発の弾丸が1000コルとかするでしょうっかね。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online) (前書き)

?話と前話を少し弄りました。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online)?

ボク達は更に装備を整えた。

NAME:sirikka

LEVEL:3

筋力:2(+50)

敏捷:4(+150)

アニールダガー2本(攻40)

金剛の腕輪(筋力+50)

魔狼の首輪(敏捷+150)

深紅猫の装備セット(防70、体術補正)

聖なる髪飾り(全バットステータス耐性)

シリカの姿は、原作通りで可愛い。

NAME:sinon

LEVEL:3

筋力:5(+50)

敏捷:1

ドラグノフ(攻1000、索敵補正、視野拡張)

火縄銃(攻20)

投擲用ナイフ30本(攻10)

狙撃手セット(防90、移動速度上昇、隠蔽率上昇)

金剛の腕輪(筋力+50)

万能の指輪(装備制限無視でドラグノフ装備)

聖なる髪飾り（全バットステータス耐性）

シノンもガンゲイルオンラインと同じ服装だ。
二人の格好はボクが趣味に走った結果だよ。

NAME：ren

LEVEL：3

筋力：3（+100）

敏捷：3（+50）

アニールブレード（攻50）

ロックキャノン（攻60）

ブースターステラセット（防120、視野拡張、速度上昇、攻撃力
上昇、特殊攻撃耐性）

聖なる髪飾り（全バットステータス耐性）

ボクのは2人に着せられたブラックロック シューターのセット
だ。

詩乃が茅場晶彦に頼んでいたみたいだよ……………やられた。

ボクは2人に髪飾りプレゼントしたりしたけどね。

「買い物で随分遅くなった」

シノンの言葉通り、日は沈み、月が輝きを放ち、はじまりの街を
優しく照らしている。

月光によってか分からないが、嘆き叫んでいた声も止んでいる。

「全くだね」

「でも、いいアイテムが沢山手に入りましたね」

シリカの言う通り、能力値上昇の薬や回復アイテムなどの必要そうなアイテムは手に入れたので、30層くらいまでは楽勝かな。

「でも、熟練度をあげる為に手加減は必要」

「だな。ボクはネタ武器も使うしね」

「聞いた限り、バトルヒーリングは必須技能ですしね」

相談しながら宿に進み、部屋を何部屋取るか相談する。

「どうする？」

「私はいつも通り、お兄ちゃんと一緒にいい」

「私も1人になりたく無いです……………」

「なら、2人部屋を借りようか」

「うん（はい）」

2人部屋とお湯にタオルを頼んで部屋へと向かった。

宿に取った部屋はシステムの的に安全なので、特に問題は無い。

「んっ」

部屋き入るとシノンが装備を解除して、ラフというか下着姿になった。

「シノンさん？」

「汗が気持ち悪いから、身体を拭くの」

シノンは転送されていた桶に入った湯と手ぬぐいを準備した。

このゲームは原作と違い、スペックに物言わせて、五感や生理現象まで再現されている。

「そうですね、私も拭きます」

「じゃあ、シリカもいるからボクは外で待ってるね」

「え？ 私は気にしませんよ？」

「ほら、洗いっこしよ」

シノンとはいつも一緒にお風呂入ってるから別にいいんだけど……

……まあ、シリカ本人がいつていうならいいや。
眼の保養にもなるしね。

それから、洗い合いを洗い始めて少したった。

「それじゃ、前を洗いますね」

「ちよっ、まつ！？」

オプションの最下層にある倫理機構とセクシャルハラスメント一部回避機構に登録した為、セクハラ警告はでないまま、天使のように可愛らしい生まれた姿のまま、シリカがタオルで隠していた下半

身に手を入れて、タオル越しとはいえ、触って来た。

「え？ 何これ……………これって……………きゃあああああ
ああっ!？」

自分で何を触ったのか理解したシリカが真っ赤になって悲鳴をあげた。

「なっ、なんで……………女の子なのに、こ、こんなのがついてるんですかっ!？」

「シリカ、お兄ちゃんは男性よ？」

「シノンがお兄ちゃんって、何度も言ってるじゃん」

「でっ、でもっ!？ こんな可愛くて綺麗な人が男の人なはずありませんよ!？」

やっぱり、男の人として見てなかったんだな。

「だから、プレイだと思った？」

「はい……………あれ？ じゃあ、私……………いま……………男の人の前で、はだかをみせて……………からだじゅうきれいにふいてもらった……………きゅっっ」

現状を正しく理解したシリカが、恥ずかしさの余り気絶して、倒れて来たので抱きしめた。

「お兄ちゃん……………」

「なっ、なにかなシノン？」

無表情＋底冷えした冷徹な視線で見詰めてくるシノンの前で、ボクは獲物のようにガタガタと震える。

「シリカをあつちのベットに運んで」

「イエス、ママ！」

寝巻として買ってあったシリカの着ぐるみパジャマ（わふくの女の子が着てる奴）を着せてベットに寝かせ、布団を掛けてあげた。

「それじゃ、んっ……………続きしよ？」

「了解」

シノンがキスした後、二人でベットに入り、自主規制のような事をした。

朝、目覚めたら動けない状態になっていた。

「……………んんっ……………」

右側を向くと、シノンの女神のように整った綺麗な顔が間近にあり、ボクの右腕を枕にして寝ている。

「すう～～すう～～」

逆の左側を向くと、シリカの天使のように可愛らしい顔がキスできるような間近にあり、こちらもボクの左腕を枕にして寝ている。

「いつの間に潜り込んだんだろう?」

「私は気付かなかったよ。それより、おはようお兄ちゃん」

「うん、おはようシノン」

起きてきたシノンと日課であるおはようの口づけを行った。

「それじゃ、私は準備するね」

「うん」

シノンはボク達の上を通って、床に降り立ち、ステータスウィンドウから装備覧を操作して、裸から昨日購入した服に変更した。

「ボクも着替えて行っか」

シノンが起きた事で空いた右手で、ステータスウィンドウを開いて、ボクも昨日購入した服に装備を変更した。

言い忘れてたけど、上半身だけはYシャツに変更してある。

「……………ん……………こない……………で……………こわいよ……………
おか……………あ……………さん……………」

うなされだしたシリカの頭を右手で優しく撫でてあげると、落ちて着いて来た。

ボク達と違ってシリカは、普通に平和な日本で過ごしていたただの子供だ。

その子供が、今からいつ終わるかも分からない生死を掛けた戦いに乗り出さなきゃいけないんだから、その不安は相当な物だ。

そして、シリカの押し隠していた不安が夢という形で出てきたんだろうな。

「シノン、ボクはしばらくシリカを撫でてるね」

「なら、私は整備でもしてる」

シノンは反対のベットでドラグノフを説明書を見ながら解体して整備を行いだした。

ボクはそのままシリカが起きるまで、頭を撫で続けた。

シリカが起きてからは少し大変だったよ。

「あうあう／＼／」

起きた瞬間、ボクの顔が間近にあつて、寝顔を見られた上に頭を撫で続けられていて、テンパっていたら昨日の件も思い出して、身体中を真っ赤にして、可愛らしい姿をみせてくれている。

「落ち着いて……………」

「はい……………」

「シリカ、これから君はどうする？ ボク達でシリカを養ってもい

いよ？ シノンがボクについて来る気満々だから聞かないけど」

さっきの寝言を聞いたら、やっぱり改めて意思を確認したくなっ
た。

「私も別にいいよ？ シリカのお陰でドラグノフが手に入ったしね」

「私は……………行きます。迷惑かも知れないけど、1人でいるのも不安ですし、SAO初めてできた大切な友達2人に何かあったら、私は後悔しますから……………」

「分かった。シノンもそれでいい？」

「ええ。私は問題ないし、全部お兄ちゃんに任せる」

シノンも文句無いなら、シリカの意思を尊重してあげよう。

「あの、お願いがひとつあるんですが、いいですか？」

「なに？ ボクは2人を護る気満々だから、可能な限り要望を聞くよっ」

「護る……………ですか？」

「うん」

「それは迷惑では……………」

ボクにとって2人は大切な存在になって来たしね。

「無駄だよシリカ。だから、私達は私達でお兄ちゃんを護ればいいんだよ」

「それもそうですね。私も頑張ります」

嬉しい事を言ってくれるね。

昔から好きだった2人にこんな事を言ってくれるとは幸せだよね。

「それで、シリカのお願いってなにかな？」

「あの、私……………独りっ子だったので、お兄ちゃんやお姉ちゃんに憧れてて……………その……………」

照れながら上目遣いという凶器を使いながらそんな事を言うてるシリカ。

「別に呼んでも問題無いよ。ねえ、シノンも大丈夫だよね？」

「うん、私とお兄ちゃんの間を邪魔しない限り問題無いよ。私も妹が欲しかったし……………」

「はい！ありがとうございますお兄ちゃん、お姉ちゃん」

「妹になったんなら、怖かったり寂しかったりしたら、何時でもボク達のベットに潜り込んだ来ていいからね。毎日シノンと一緒に寝ているしね」

「はい、よろしく願います……………／／／」

こうしてボク達のSAOの生活が本格的に始まったのだった。

ソードアート・オンライン(Sword Art Online)?

可愛い妹が追加されたよ。しかも、ニュータイプかイノベーターかも？

「ほら、行くよ」

「はいはい」

ボクは両手に花状態(女の子三人が仲良く手を繋いで歩いている)というのは決して認めない)で、はじまりの街を周りの視線を無視して移動。

ホルンカの街にやって来ました。

「装備は問題無い?」

「うん」

「大丈夫です」

「なら、シノンにはこのマフラー、シリカには指輪をあげるね」

「「ありがとうございます」」

二人に渡したのは簡単、経験値上昇効果がある装備だ。

「あの、なんで左手薬指なんですか？」

照れながら小首を傾げるシリカに答えてあげる。あつ、指輪を薬指に入れたのはボクだよ。

「害虫避けだよ」

自分の長い黒髪ツインテールを弄りながら答えた。

「なるほど、だから私にもここに嵌めさせたんだ」

シノンの薬指には万能の指輪が付いている。

「そうそう。それより、ツインテール解いていい？」

「駄目」

「絶対駄目です」

朝食食べたら、強制的にツインテールにされたんだよね。

「え〜」

「私の裸みたんですから、それくらいいいじゃないですか。とって
も似合ってますよ」

「あれは勝手に……………」

「何か？」

「なんでもないよ」だ

頬つぺたを膨らませながら先に進む。シリカの精神も問題無いしいや。

「今日の目的は第一層のダンジョンとラージネペント討伐だよ」

「はいはい」

「勝てるかな？」

「余裕」

シリカの問いに、二人でハモって答えてあげた。

リトルネペントがいた森をさらに進み、奥に進んで行く。

「怖いです……………」

シリカがボクの服を掴んできた。これは無理が無い。だって、朝方なのに、木々が日光を遮って暗く、そのせいか並木道は独特の壊さを演出している。

「戦闘音がする……………」

「へえ、こんな早くにお仲間さんがいるんだね」

「プレイヤーでしょうか？」

「そつだろつね」

誰が出るか楽しみだね？」

「行ってみよう。いいよね？」

「「はい(うん)」」

シノンの案内に従って移動する間に、ひとつ提案してみる。

「シリカ、短剣二刀流してみない？」

「出来るんですか？」

「システム的には出来ない。でも、片手武器を片手に一本ずつ装備する事は可能だから、頑張れば出来るよシリカ」

シノンの言う通り、原作でキリトがアサルヘイムオンラインALLOでやってるしね。

「それに、双剣なら防御と攻撃がやりやすいしね」

ぶつちやけ、EXスキル《二刀流》や《十字剣》は修練を積みれば習得出来るように修正した。MMOなんだから、みんな努力すれば、勇者になれるチャンスをあげなきゃいけないって説得した。茅場さん分かってくれたので、条件付きの許可だったけど問題無い。

「じゃあ、挑戦しますね！」

「「頑張つて」」

更に歩いていくと、ラージネペントの悲鳴が聞こえてきた。

「いた」

「黒い人……………」

戦っていたのはあの黒い剣士だ。

「やつ、早いね」

「……………君達もこいつらか？」

「そうだよ。あつ、シノンとシリカは先に狩りを初めておいて」

「ん」「分かりました」

とりあえず、二人を先行させた。シノンには、この辺りのプレイヤーがいないか調べて貰うしね。

「いいのか？」

「いい装備を持ってるしね」

「そのようだな。Wikiに乗ってた能力増強装備か……………」

「そうだよ。運の要素が強いけど、なんとか手に入れたよ」

「それで、何のようだ？ その装備ならここは楽勝だろう」

やっぱり、キリト君はPKして来ないね。

「今から派手に狩るから、パーティー組んでご一緒しない？」

「君等に得はないだろ？」

「このまま始めるとMPKになりそうだからだよ　あと、お兄さんが気に入ってるから」

「？　まあ、いいよ。実際に一人じゃきついから（こんな子供をほつて置くのもなんだしな）」

よし、キリト君とお知り合いになれた！

「お兄ちゃん、他に人はいないよ」

キリト君にパーティーを投げて置く。

「なら、問題無いよ。あつ、自己紹介しとこうか。ボクはレン、男だよ」

「男っ!?!」

「うう……………」

「私はシノン、お兄ちゃんの妹。もう一人がゲームの中で出会ったシリカ」

『シリカといい、ます』

「俺はキリトだ。よろしく。それでどうするんだ？」

「ふふ、狩りは簡単。シノンの実付きを狙撃。シリカはラージネペントの群れに突っ込んでシノンの射線上に敵を纏めて誘導。ボクとキリト君でシノンの護衛だよ」

『無理です!』

「その首輪全力発動で大丈夫。ボクを信じる!」

『うう……………分かりました』

この辺りで、現在のスペックを理解させよう。

「狙撃開始する」

銃声が響き、シリカがいる遠くの方で実付きが爆発した。

「大丈夫なのか?」

「平気平気、観てみなよ」

シリカの方を観ると、敵がシリカの速度に付いていけて無い事が良く分かる。ボク達ですら霞んで見えるからね。

「ステータスの差は歴然だな」

「でしょ? ラッキーヒットしか……………」

「あつ、シリカこけた」

「めった打ちにされてるけど……………ミスと中つても1とか2ばっかだな」

予想外の速さにコントロールできなかつたんだろうね。

今のシリカは足を拘束されて原作二巻のような格好になっている。

「しかし……………」

「うん、触手に絡まれてる女の子ってエロいよね……………」

「そつだ……………って、違うからな!？」

キリト君も男の子だね。

「不潔、最低……………」

シノンが無表情＋冷徹な侮蔑の視線を送ってくる。

「ぐはっ!？」

「キリト君がダメージを受けた！」

そして、シノンは自分も行くこうとしない!」

シノンがボクに見せる為にか、自ら動き出そうとしていた。

「ち……………」

「お前等……………」

「あはは……………キリト君、その握った拳は収めようね?」

「ふざけ……………」

『助けてくださっ……………ごめんなさい、自分で何とかします！
だから、シノンお姉ちゃん、八つ当たりで怒るのやめてっ！？ 私
は悪くないからっ！？』

シリカが助けを求めた瞬間、シノンが構えていた火縄銃から銃声とともに弾丸が放たれて、シリカの顔の真横を通って後ろの敵を撃ち殺した。

それに恐怖したシリカが、アニールダガーをもう一本持ち出して一生懸命につるを切って抜け出した。

「助けなくていいのかと聞こうと思ったただけなんだけど……………」

「必要無いでしょ。未熟なシリカにお仕置きだし……………これで更に頑張るとおもっよ……………刺されそうだけど」

「あはは……………」

「二人共、ふざけてないで来た」

「ああ」「」

ボク達はアニールブレードを持ってシノンの横に立つ。シノンは火縄銃をアイテムストレージに戻して、ドラグノフを装備した。その銃はシノンの身長より少し小さいくらいだ。それを地面に横たわって狙撃体勢を取った。

「さて、目標はシリカ……………」

「『』違つから!』」

「の後ろの敵……………」

シノンの冗談(？)で気を引き締まったボク達は、シリカが左右に移動して固めた大量のラージネペント(リトルを大きくしただけ)を一直線に並ばせながらこちらに戻って来た。ズレそうなのは、高速のヒット&アウエーで蹴りを入れて修正していた。

「私は一発の銃弾……………ただ、撃ち貫き目標を滅ぼすだけ……………」

「怖っ!」

「シリカ……………飛んで……………」

「ひゃいつ!」

シリカが慌てジャンプした瞬間、ドラグノフからマズルフラッシュと共に発射された弾丸は、一列に並んだラージネペントを何の抵抗もを無しに貫いていく。

更に、シノンが転がり、射線を変えて二発目を放った。

「ふう〜」

「ご苦労様……………」

「間違いなくチートだな……………」

キリト君の思いには概ね同意。

「じゃ、後よろしく」

シノンが近くの木の根に、ドラグノフを抱くようにして座わりながら、手を挙げてそんな事を言ってきた。

「行くか」

「そうだな……………」

ボクはキリト君と一緒に残敵を滅ぼしているシリカの元に向かった。

シリカは高速で移動しながら、ラージネペントが反応できないのをいい事に、リトルネペントと同じく弱点であるつるの付け根を攻撃して殺している

「俺らも行くぞ」

「はいな！」

ボクがキリト君に迫っていたつるを切り落とし、キリトがつるの付け根を剣技を使って切り付け、ラージネペントを殺す。

「次！」

キリト君がつるを切り落とした瞬間、キリト君の前に滑り混んで、つるの付け根を切り落とす。

「さすが黒の剣士……………」

「そつちも強いな……………しかし……………」

「ボクは、中はクエストメインにしたからね……………後、GM
(ぼそ)」

「ん？　なんか言ったか？」

「気にしないで」

ボク達は舞うように立ち位置を入れ替えながら敵を滅ぼしていく。
敵がこつちに集中すると、シリカが簡単に殺してくれるので、どん
どん死んでいった。

30分後、全ての敵が殺されPOP待ちとなった。

「酷いです……………」

「ごめんって、シリカ……………」

頭を撫でてやると気持ち良さそうにして、だんだん怒った顔が崩れ
て行った。

「むう……………」の撫で撫では気持ち良すぎすぎてするいです……………」

「ぬるい」

「はいはい」

シノンの頭も撫で撫でしてあげると、呆れた目を向けて来るキリト君がいた。

「それで、君達はとうするんだ？」

「一層のダンジョンのボスを目指すよ」

「ボスか……………」

「うん、熟練度稼ぎに使うつもり。死にそうになったら逃げて仕切り直し」

「ボスがかわいそうだが、それが効率的だな」

ボスはなかなか死なないから効率的だ。

「Lvが8になったからスキルスロットも増えたしね」

「バトルヒーリングがベスト」

「そうだな」

「それじゃ、行くうか。キリト君も来るよね？」

「俺もいいのか？」

「とりあえず、今日は一緒に行くうよ」

原作じゃ、ほとんど一人だからね。なら、ボク達と狩り友くらいになればいいと思う。それなら、あの人達も救えるだろう。

「分かった。よろしく頼む」

「「「こちらこそ」「」」

それからボク達は、ボクとキリト君を前衛にして、次にシノン、最後にシリカという順番で、森の奥深くにあるダンジョンに潜っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2266z/>

ステラになってSAOで大暴れ！

2011年12月11日21時35分発行